

## 本号のテーマ：「カリキュラム・マネジメント」を進めるための第一歩

### 1 「コロナ禍」で生み出される新たな取り組み

新型コロナウイルスによる感染症の世界的な流行が始まって2年になろうとしています。令和2年3月には学校の全面休校措置が行われ、さらに新学期に入っても休校措置が取られ、ご承知のように学校にとっては、前例のない対応を迫られる大変混乱する事態となりました。この間、子どもの学びの保障をどうするかが大きな課題となりましたが、逆に、こうした事態は、児童生徒にとって、学校が学力保障のみならず、仲間と共に育つことができる成長保障の場として、また、家庭を離れて生活する居場所として大きな役割を持っていることとして再認識されることになりました。

佐久市内のそれぞれの小中学校では、児童生徒ができるだけ休校せずにコロナ禍を乗り越えることができるよう、学校職員の献身的な努力によって感染対策を進めてきております。特に、「三密」の状態となる運動会、音楽会、外部との接触が多くなる見学、体験活動、修学旅行、遠足等の行事はそのあり方を見直さざるを得なくなりました。この2年間、様々な工夫と新たな取り組みが、保護者や学校を支援する方々との理解と協力のもとに進められております。

こうした行事の実施については、刻々と変化する感染状況を受け止めながら、その意味を問い直し、前例にとらわれず、今取り組むことができることは何かを模索しながら新たな実践を生み出している事例が幾つも報告されております。それは、実践した学校の先生方が意識して行ったのか、緊急事態における一過性のものとして行ったのかは別として、これからの学校に求められる、児童生徒の言語能力の育成、カリキュラム・マネジメントの推進、端末を活用した学習の展開、主体的・対話的で深い学びの実践等の新たな教育を創造する試みとなっているものも少なくありません。

今回は、市内のある小学校6年生の修学旅行(10月実施)の取り組みを紹介し、その実践から「カリキュラム・マネジメントの推進」を軸にした新たな教育を創造する可能性について述べてみたいと思います。

### 2 今年こそ東京に行けるかな

昨年度の6年生は、新型コロナウイルス感染拡大により、修学旅行は東京方面を断念し県内の旅行となりました。今年度は年度当初から感染拡大が小康状態となり、「今年こそ東京に行けるかな」という期待が持てるようになりました。そこで、6学年担任と業者とで修学旅行先について、東京方面で実施する案と、東京がダメになった場合は静岡県

で実施する案も用意して検討を重ねました。ところが、7月頃からオリンピックの開催に合わせるかのように感染は再拡大を始め、8月の終わりから9月にはピークを迎えました。修学旅行実施まで2ヶ月切っています。東京方面は今年も断念せざるをえませんでした。さらに静岡県も感染拡大で無理な状況となりました。急ぎ感染が拡大していない近県か県内を目的地とする案を考えなくてはなりませんでした。

子どもたちは東京に行けずがっかりするかもしれません。その時、ふと担任の頭をよぎったことがありました。「担任の私はわくわくして修学旅行の計画を立てていた。子どもたちにも自分たちで目的地を決め計画を立てるところから考えさせたらどうだろう。旅行方面は変わっても、きっとわくわく心を働かせて修学旅行に向けた取り組みを進めてくれるかもしれない。この際、学校が用意し与える修学旅行から子どもたちが自分たちでつくる自分たちの修学旅行にしたらどうだろう。」ということでした。

そして、このアイデアをもとに前例のない修学旅行に向けた取り組みが始まりました。



### 3 カリキュラム・マネジメントの確認

さて、話しの途中ですが、ここでカリキュラム・マネジメントについて、改めて小・中学校学習指導要領に示されている言葉を載せておきます。

第1章総則「第1 小・中学校教育の基本と教育課程の役割」の4

(ア) 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、(イ) 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、(ウ) 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

また学習指導要領解説 総則編<第一章「1 改訂の経緯及び基本方針」>

中央教育審議会においては・・・学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどが求められた。

① 何ができるようになるか ②何を学ぶか ③どのように学ぶか ④子供一人一人の発達をどのように支援するか ⑤何が身に付いたか ⑥実施するために何が必要か

上の枠にある(ア)は下の枠の①②③④と対応、(イ)は⑤と対応、(ウ)は⑥と対応していると考えられます。キーワードは「組み立てる」「実施状況を評価」「改善」「組織的かつ計画的・・・教育活動の質の向上」ということです。この視点からこの学校の修学旅行の取り組みを捉えていきます。

### 4 「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「どのように支援するか」

感染拡大後の取り組みは、始めから「組織的かつ計画的」に進められたというものではありませんが、刻々と変化する状況に合わせて何をすべきかを、子どもの学ぶ視点か

ら考え直しているところに大きな意味と可能性があります。

まず、「何ができるようになるか」について考えてみましょう。担任の頭をよぎった言葉からすると「わくわく心を働かせて修学旅行の取り組みを進めることができるようになる」となるでしょうか。

「何を学ぶか」については、「自分たちで目的地を決め計画を立てるところから考え、修学旅行を自分たちの手で実施することを学ぶ」となります。

次に「どのように学ぶか」です。いわゆる指導計画の作成と指導です。

○指導計画については、おおまかな学習展開を次のように考えました。主に総合的な学習の時間を使って進めています。

- |      |  |
|------|--|
| 学習 1 | どの方面が目的地としてふさわしいかグループをつくり調べる。                    |
| 学習 2 | 修学旅行地としてグループで決め出した候補地をプレゼンテーションし、クラス全体で目的地を選定する。 |
| 学習 3 | 修学旅行実施に向けて係をつくり準備する。                             |
| 学習 4 | 修学旅行を実施する。                                       |
| 学習 5 | 修学旅行での学びをまとめ、来年度修学旅行を実施する 5 年生にプレゼンテーションをする。     |

○どのように指導したかを、学習 1「どの方面が目的地としてふさわしいかグループをつくり調べる。」についてお話しします。

**学習問題**は「みんなだったらどこに行くかな。そこに行ったらどんなことが学べるかな」

**見通し**として示したのは、子どもたちが旅行方面を決め出す条件です。

- コロナウイルス感染が拡大していない地域
- 4年、5年、6年の社会科の学習と関連付けて
  - ・その土地の自然や産業に触れることができる。
  - また、産業に従事している人々の工夫や努力を学ぶことができる。
  - ・その土地の優れた文化や文化遺産、歴史を学ぶことができる。
  - また、自分たちで体験し実感できる。
- 仲間と協力してよりよく行動しようとする自主的な態度や、公共の場に応じた行動など社会道徳を身に付けることができる。

社会科、特別活動、道徳と教科等を横断する視点からの修学旅行の学習です。子どもたちは早速、クロームブックを使って候補地の情報収集を始めました。

次に「どのように支援するか」について、特に留意したことを二つお話しします。

一つ目は、日本地図に色分けされた各県の感染状況の情報を子どもに提示して修学旅行方面を考えさせたことです。感染状況は日々変化します。感染



レベルの高い地域もありますが、感染レベルを下げたまま保っている地域もあります。下がっていく地域も見えてきました。

二つ目は、子どもが候補として挙げた県や見学先について、業者からその県の感染防止の状況、安全性、バスの運行の可否、滞在時間、費用について情報をもらい、目的地を検討できるようにしたことです。

その結果、子どもたちが決め出した方面は山梨県でした。山梨県は「山梨モデル」といわれるほど日本一感染防止対策が進んでいる県であるという情報を業者からいただきました。その山梨県の取り組みに学ぶことができるということも選定の要因になったようです。実際に子どもたちは宿泊先のホテルで感染防止対策の徹底ぶりを目の当たりにすることとなりました。

## 5 実施するために何が必要か ～人的又は物的な体制の確保～

まず物的な体制の確保です。こうした学習を実現するために欠かすことができないものとなったのは、一人一人がクロームブックを使うということです。クロームブックを使うからこそ、個々で調べたり、グループでまとめたり、発表したり、検討したりすることが可能となります。今年度、児童全員にクロームブックが配布されたことがこの学習を進める最大の物的な体制の確保となりました。



さらに必要となるのはクロームブック活用の技術を身に付けることです。子どもたちはこの取り組みで文字入力、検索、編集、プレゼンテーション等の技術を向上させました。

次に人的な体制の確保です。クロームブック活用の技術を身に付けるための支援もそうですが、先にも述べたように旅行業者も学習支援の一員となってもらうことも必要な方策となりました。こうして修学旅行が実施されたわけです。

## 6 「何が身に付いたか」 ～評価～

学校現場で研究が最も遅れているのが評価です。テストで点数として現れてくるものはまだ評価しやすいのですが、特に行事については、実施することに重点が置かれてしまい、その行事を通して子どもの何が育ったのか評価することはあまりなされておられません。そこが曖昧になってしまうために子どもが発揮した力は十分に定着せず、「育成」につながりにくい面があります。カリキュラム・マネジメントを実施する課題は、この評価研究がなかなか進まないことにあります。

「育成」という言葉が出てきましたのでここで少し触れておきます。学習指導要領総則編には「育成を目指す 資質・能力」という言葉が出てきます。目指す資質・能力は「育成」するものです。教え込んで身に付けさせるものではありません。「育成」ですから、子どもの今ある資質・能力が目指す目標に向け少しずつ変容していくようにすることです。したがって評価は、どのように、またどの程度変容したのか、どのようにできるようになったのかを捉えていくこととなります。特に思考力・判断力・表現力の一

部や学びに向かう力の評価の対象として使うことができやすいものは子どもが書き表した文章です。学習の振り返りでの記述は有効と言えます。

さて、この修学旅行の学習を通して子どもの何が育ったのでしょうか。子どもたちは修学旅行で見学した場所について感想を書いております。ここでは例として信玄餅の「桔梗屋本社工場」の見学についてAさんの書き表した感想から評価してみましょう。担任のお話では、Aさんは理解することに時間のかかることが多く、担任が心を配って見守ってきた児童だそうです。修学旅行の学習では進んで取り組む姿を見ることができたそうです。



「桔梗屋本社工場」

はたらいている人がいっぱいいました。ふくろづめがすばしかったです。

表現されていたのは2つの文章です。「あれっ、少ししか書けていない。」と思わないでください。2つ書けたということは、案内された工場の中で2つの事実を自分でつかみ取ることができたということです。きっと思った以上にたくさんの方が働いていて驚いたことでしょう。でもそうした心の働きはすぐに忘れてしまいます。記述できたということは見ようとして見たからこそできたことです。さらに、働いている人が何をしているのか、一人一人の手の動きに目を向けています。観察しているのです。作業する人が信玄餅を一つ一つ包み、袋に入れていく素早さに目を見張ったことでしょう。それは仕事に従事している人々の工夫や努力の姿への気づきかもしれません。その記述が「すばしかった」という言葉で表れています。Aさんが自ら「わくわく心を働かせて修学旅行の取り組みを進めること」ができたからこそ捉えることができたと読み取れます。変容の一つの姿です。これが評価です。自分の目で見て自分の心でつかみ取れたAさんの姿を教師が受けとめ、Aさんと共に喜びたいものです。

そうやって教師が受けとめることでAさんは自分の取り組みを良いことだと判断し、今度はもっとたくさん気づきを持つと思うようになるでしょう。さらに、次の学習では、3つ、4つとつかみ取れる可能性が生まれてきます。（富士湧水の里水族館での記述は4つの文章になっていました。）評価し、表現されたものの中にある良さを認め喜んであげることが「あまやかし」ではありません。「育成」のための指導そのものです。子どもはつかみ取る内容が増えてくると、自然とそれらをつなげたり、学んできたこととつなげたりして考察する姿が生まれてきます。「桔梗屋本社工場見学」での他の児童の記述にはそんな内容もあるはずです。これが「思考力・判断力・表現力」の育ちであり「言語能力」の育ちです。

Aさんを受けとめ共に喜びを持つと、教師自身も、次の学習では子どもがどんな取り組みをするのか、何をつかみ取るのか楽しみになってきます。そして子どもが主体的に取り組めるよう教材の提示や追究のさせ方等の「組み立て」を工夫したくなります。それが「改善」ということです。この小学校の学校教育目標は「**一人一人が大地の星に くらまず一人の子どもありき**>」です。こうした取り組みは学校教育目標を具現化したも

のにほかなりません。一人一人の子どものきらきら輝く姿が浮かんできます。「教育活動の質の向上」を図るカリキュラム・マネジメントの第一歩を踏み出す瞬間です。

さらに注目するのは、修学旅行の取り組みの最後が修学旅行での学びをまとめ、5年生へプレゼンテーションするということです。6年生にとっては「相手に分かるようにまとめる」という主体的な活動となること、クロームブック活用能力の向上になることはもちろんですが、5年生にとっては、この6年生との交流をきっかけとして、今度は始めから組織的、計画的に教科等を横断した視点で組み立てて実施し、評価、改善を図っていくことが可能となります。教師も子どもも共に育つことにわくわくしながら取り組むことができる生きたカリキュラム・マネジメントになるはずです。この学校の6年生の修学旅行の取り組みはそんな可能性をもった貴重な実践となりました。

## 7 「変化の時代」の教育の創造

さて、この取り組みについて私が校長先生や6年生の担任からお話しをお聞きしたとき、ある一文が心に浮かんできました。それは学習指導要領解説総則編の第1ページに綴られた次の言葉です。

「・・・急速に変化し、予測が困難な時代となっている。・・・このような時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」

今、学校を含めた社会全体が急激な変化にさらされています。2年前、だれが現在のようなコロナ禍の学校を想像したことでしょう。また、今年度始めに情報端末がすべての児童生徒全員に配布されることを予想したことでしょう。学習指導要領改訂の次の年に出された第3期教育振興基本計画の前文には「激動の時代を豊かに生き、未来を開拓する多様な人材を育成するためには、これまでと同様の教育を続けていくだけでは通用しない大きな過渡期に差し掛かっている。」と記されています。

こうした中、佐久市内の各学校では先生方が様々な工夫をしながらこの事態を乗り越えようとしてきました。その取り組みの中は、学習指導要領や教育振興基本計画に記された新たな教育の進め方を、教育現場からの具体的な実践例として提案する貴重なものが幾つもあります。紹介した6年生の事例も新たな教育の方向を示すものです。学校で学ぶすべての児童生徒に、これからの困難な時代に立ち向かっていくための生きて働く資質・能力が「育成」されるよう、各学校の地道な取り組みを意味付け、佐久市全体の学校で共有し高め合っていくことができればと願っております。